アイヌ生活文化再現マニュアル

織る【樹皮衣】

財団法人　アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ生活文化再現マニュアル

織る

—樹皮衣—

財団法人　アイヌ文化振興・研究推進機構

発刊にあたって

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構は、平成9年7月の設立以来、アイヌ文化の振興、アイヌの伝統やアイヌ文化に関する知識の普及啓発、アイヌ文化等に関する研究の推進や助成などの各種事業を実施しております。

そうした事業の一環である「アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業」は、アイヌの伝統文化を、映像や音声、文字などによって記録し、アイヌの人々をはじめとして、広く一般の人々や研究者の利用に供することにより、アイヌ文化の伝承・保存を図ることを目的としています。

平成11年度は、アイヌの伝統家屋「チセ」の建築、並びに樹皮衣「アットゥシ」の製作を映像・文字化しました。

本マニュアルがより多くの人々の利用に供され、アイヌ文化の振興が推進されるとともに、我が国の多様な文化の一層の発展が図られれば幸いです。

目　　次

樹皮衣・アッ゜シとは ……1
樹皮衣・アッ゜シの制作 ……3
樹皮の採取
煮る・洗う・干す
1 煮　る ……6
2 洗　う ……8
3 干　す ……9
糸紡ぎ
1 糸づくり……10
2 糸玉づくり……13
織り機の構成……14
糸のばし……16
織る準備……19
織　る……22
仕立て・切り伏
1 裁　断……28
2 仕立て・身頃……29
3 切り伏・身頃……32
4 仕立て・袖……40
5 切り伏・袖……41
刺　繍
1 刺繍糸を染める……43
2 刺　繍……44
袖をつける・紐をつける
1 袖をつける……47
2 紐をつける……48
完　成

参考文献 ……51
アッ゜シを展示・収蔵している施設……53

樹皮衣・アットゞシとは

アットゞシ

アイヌの伝統的な衣服は素材や文様などによって地域性が見られ、名称も異なっています。アイヌが衣服に用いた素材は、動物を使ったものと植物を使ったものに大きく分かれ、さらに材料としてあるいは完成品として本州、大陸からもたらされたものがあります。

これらの衣服の中でアイヌの代表的なそして最も身近な衣服は、アットゞシと呼ばれる樹皮衣です。オヒョウやシナ、ハルニレなどの木の繊維を布にしたもので、木の皮を剥ぐことに始まるこの仕事は今でもアイヌの人たちを中心に受け継がれています。

アイヌの女性にとり衣服を仕立てることはとても大切な仕事のひとつでした。自らの手で織り、刺繍したこの樹皮衣を夫に、また立派に成長した子供達に着せることはアイヌの女性にとって最高の誇りだったのです。

ここで紹介するのは
北海道日高地方平取町二風谷に住む
藤谷るみ子さんが母親から受け継いだ
樹皮衣の制作方法です。

藤谷るみ子さん

本文中のアイヌ語表記は監修者の萱野　茂氏の指導に基づいています。
※発音について　　ト゜＝tu（トゥ）　アットゞシ＝アットゥシ

樹皮衣・アッ゜シの制作

樹皮の採取

材料となるオヒョウ〈アッ〉の樹皮は春から秋まで採取できます。特に木の内部に水分の多い春先から夏ころまでの期間が樹皮を剥がしやすく、水気の少ない冬場では樹皮をきれいに剥ぐことができません。

オヒョウの木はあまり細くなく節や枝の少ないものを選びます。直径15～20㎝位の太さが良いとされています。(写真１)

写真１

立木の素性を調べるために根元付近にナタを入れ、樹皮を少し剥ぎ取り内皮の木片を噛みぬめりを確かめます。(写真２)

写真2

オヒョウの樹皮から糸を作るために湯に木灰を入れて樹皮を煮るのですが、噛んでしごき、ぬめりの少ないほうが内皮が溶けないので良いといいます。(写真３)

写真3

樹皮を剥ぐのは立ち木からです。根元から30～40㎝位のところに、水平にナタをいれます。この時木質部までは切り込みません。樹皮の端をおこして両手で持ち７～８㎝位の幅で真直ぐ上に剥ぎあげます。
(写真４)

写真4

ねじって揺さぶるようにして梢に向かって剥ぎ、途中で細くなって切れないようにします。真直ぐに同じ幅で長く剥ぐことができた樹皮からは長くて丈夫な糸が作れるのです。よれて真直ぐに剥ぎあがらなかったり、すぐに切れてしまう樹皮は良い糸になりません。
(写真５)

写真5

オヒョウの木から樹皮を剥ぐのは非常に力のいる作業なので男性にとっても重労働です。また斜面で剥ぐことが多く危険な作業でもあるのです。(写真６)

写真6

樹皮を立ち木から剥いだ後、その場で固い外皮を丹念に削り取り、内皮を分離します。樹皮を折り曲げ、外皮が裂けた所から手ではずしていきますが、手で剥がせない時にはナタを使い丹念に外皮を削りとります。

早いうちに分離しないと時間がたつにつれて乾燥し、外皮が剥がれにくくなってしまうのです。(写真７)

写真7

採った内皮は折りたたみ、同じオヒョウの内皮で縛って束ねます。これで山での作業は終わりました。

煮る・洗う・干す

1　煮　る

次に内皮を煮る作業です。煮るときには木灰を使います。オヒョウの内皮は薄い皮が何層にも重なっています。木灰で煮ることにより軟らかくなり、薄い層に剥がれるようになるのです。

採取してきた樹皮はのばして２～３日干します。こうして乾燥させた樹皮は湿気のない場所に置くことで何年も保存できます。(写真8)

干した樹皮は束にして煮る準備をします。

写真8

湯を沸かし沸騰したら樹皮の束を入れ、煮立つ直前に木灰を入れます。(写真9)

写真9

落とし蓋をして再び沸騰させ、数時間煮ます。上下の樹皮を入れ替えて均一に煮えるようにします。煮る時間は採取した樹皮の状態や火力によって違いがあり幾度か樹皮を触り具合を確かめます。(写真10)

写真10

全体に火が通り、中まで煮えて軟らかくなり皮が剥がれるようになると湯から上げます。（写真11）

写真11

古くから行われていたのは温泉に内皮を晒し熟成〈オン〉する方法です。またこの他に樹皮を沼などに浸けて樹皮を軟らかくする方法もあります。これは樹皮が浮かないよう石を縛り付けて沈め、水面に出さないようにまた底に着けないようにしました。これは水底の泥に樹皮が触れると樹皮（内皮）が腐るからです。水温にもよりますが軟らかくなるには数週間かかります。

2　洗　う

木灰で煮て軟らかくなり赤茶色に染まった樹皮のぬめりを取るため流水で洗います。(写真12)

写真12

ぬめりの多いままでは糸にしたときに弱く
ｱｯﾄﾟｼには使えません。

内皮を洗いながら剥がしていきます。この段階では繊維の層が何枚にも離れるようになります。剥がす時には内皮の中間を持ち、揉むようにして繊維が離れたところに指を入れ、細くならないよう均等な幅で剥ぐようにします。(写真13)

写真13

剥がした後も流水に浸してぬめりを十分に洗い流します。(写真14)

写真14

3　干　す

ぬめりを落として薄く剥いだ内皮を戸外で竿にかけて干し、２週間ほど天日に晒します。(写真15)

写真 15

天日に晒すことにより赤茶の色が抜け、さらに雨に当たることによって色が平均化されてくるのだそうです。

すっかり乾燥すると湿気の無い場所なら何年でも保存できます。(写真16)

写真16

糸紡ぎ

1　糸づくり

乾燥した薄い内皮を約1500ｇ用意し糸をつくります。糸にする時に出る余分な繊維を取り除いていくと、ｱｯﾄﾟｼ一着分に必要な糸の量、約1200ｇになります。

糸にするためにさらに内皮を薄くします。剥がしやすくするために樹皮を再び水に漬けて軟らかくします。(写真17)

写真17

水分が十分に樹皮の中まで浸透したら水を切り、雫がたれない程度に湿った状態にします。(写真18)

写真18

内皮を揉むようにして裂け目を作り、その中に指を入れ押し開くように裂きます。(写真19)

写真19

内皮をできるだけ薄くします。(写真20)

写真20

一枚にした後２～３㎜の幅で細く裂きます。この時、途中で切れることのないよう慎重に裂きます。
(写真21)

良い内皮は繊維に添って長く裂くことができ、長くて丈夫な糸が作れますが、そうでない場合は横に裂けて短くなり、結び目の多い糸になります。

写真21

必要な量の内皮を裂き終えると再び乾かします。糸にする時には乾いた繊維を撚るのです。(写真22)

写真22

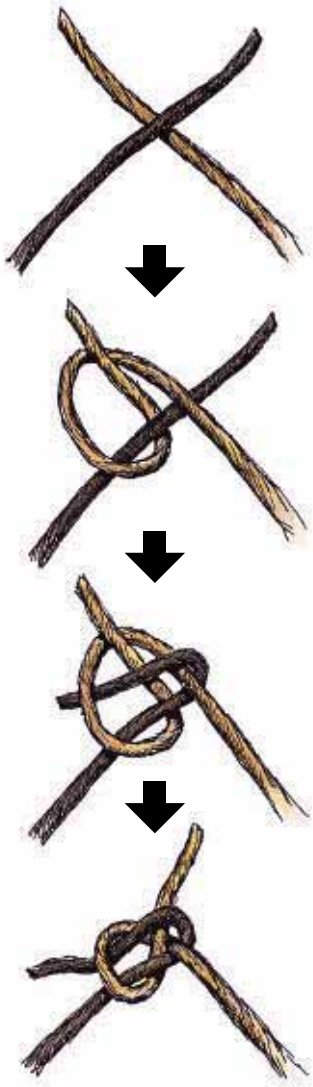
いよいよ糸紡ぎです。細く裂いた内皮を指で軽く撚りをかけます。織るときに締めにくくなるので強く撚りをかけません。太さは１㎜程になります。(写真23)

ささくれだっていたり裂けてしまっている部分は切り取り毛羽立ちの少ない糸にします。細く弱そうな糸は２本を１本にして撚り、太さを同じにします。

写真23

糸を継ぎ足すには「機結び」をします。「機結び」は結び目が小さく解けてきません。(図１)

図1



このように結びながら長い一本の糸を作ります。

オヒョウで糸を作るということはとても手間のかかる仕事です。アイヌは昔からオヒョウの糸を大切に使ってきました。たとえ短い糸でも根気よく繋いで長い糸にしたものなのです。(写真24)

写真24

2　糸玉づくり

必要な量の糸ができると糸玉〈カタヶ〉を作ります。２本の指を使って糸を数回巻き同じ糸で横に巻いて止め、芯にします。芯を手に持ちその指の周りに糸を巻いていきます。(図２)

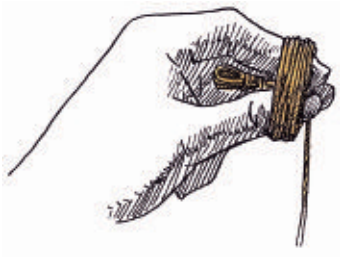


図2

この糸玉は、中の芯を取り出せるようになります。(写真25)

写真25

角度を変えながら巻き直径を約16㎝の球形にします。

一着分には縦糸と横糸を合わせてこの大きさの糸玉が２つ必要です。(写真26)

写真26

良質の布を織る為にはこの糸玉づくりまでの作業がとても大切です。

織り機の構成

アットゞシの織り機アットゞシカラペはそれぞれが分離した部分から成っている織り機です。縦糸〈アシカ〉を張って織り手に繋がる最も古いタイプの機織り具と言われています。

糸のばしをする時には縦糸を結ぶための棒杭〈ウライニ〉が１本、織具を固定する棒杭が数本必要です。

１）筬（おさ）　〈ウォサ〉
縦糸を平列させるもので織具では一番遠くに置かれます。

２）開口具・上下の糸を分離する道具〈カマカブ〉
縦糸を上下に分離させるはたらきをします。

３）綜絖棒（そうこうぼう）・糸を掛ける棒〈ペカウンニ〉
縦糸の下糸をすくいとる為の糸をかける２本の棒です。(写真27)

４）織物のへら〈ペラ〉
横糸〈アフンカ〉を通すために上下の縦糸を押し広げたり糸を締めるなどさまざまな使い方をします。(写真28)

５）横糸を巻く棒〈アフンカニ〉(写真29)

６）布巻取棒〈トゞマムンニ〉

７）腰に当てる布〈イシトムシブ〉
織り手と織機を固定するものです。織り手の腰に当ててトゥマムンニと紐でつながるものです。(写真30)

写真27（写真左より）

１）筬（おさ）〈ウォサ〉
２）開口具・上下の糸を分離する道具〈カマカッ〉
３）綜絖棒・糸を掛ける棒〈ペカウンニ〉

写真28

４）織物のへら〈ペラ〉

写真29

５）横糸を巻く棒〈アフンカニ〉

写真30（写真左より）

６）布巻取棒〈トゞマムンニ〉
７）腰に当てる布〈イシトムシッ〉

糸のばし

織り機に縦糸をかける作業〈アット゜リ〉です。糸のばしは糸が絡んだり、長さが不揃いにならないように平らな場所と風のない時を選びます。

織り機の置かれる場所からおよそ９ｍ離れた場所に棒杭を打ちつけ縦糸の端を結びます。(写真31)

写真31

縦糸をかける織り機の一部、布巻取棒を杭で固定します。筬、開口具は布巻取棒の前に置きます。
(写真32)

写真32

糸のばしは２人で行い、ひとりは縦糸から糸を出し、手の中で滑らせながら歩き、縦糸を結んだ棒杭と織り機の置かれた場所とを往復します。(写真33)

写真33

棒杭に結ばれた縦糸を織り機側にいる織り手が受取ると糸の途中で輪をつくるようにたわませ、筬の端の目に通します。

筬の目には２本の縦糸が一度に通り、上糸と下糸になります。

筬に通した糸は開口具・上下の糸を分離する道具で上下に分け、糸をひとひねりして布巻取り棒にかけます。

糸を運ぶ人が筬を通った糸を持ち、糸玉から糸を引き出しながら最初に糸を結んだ棒杭にかけます。
(図３－１)

のばす分だけこの作業をくり返します。

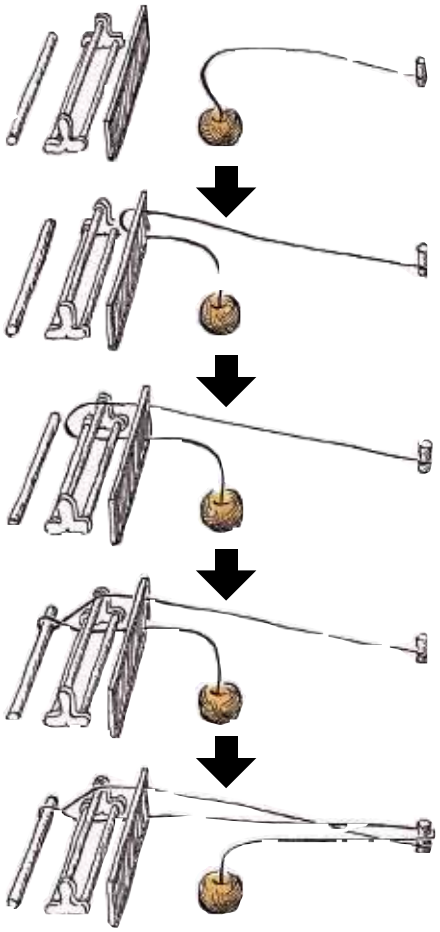


図3-1　糸のばし作業の模型図

糸を上下に分けひねって布巻取棒にかける様子。
(図３－2)

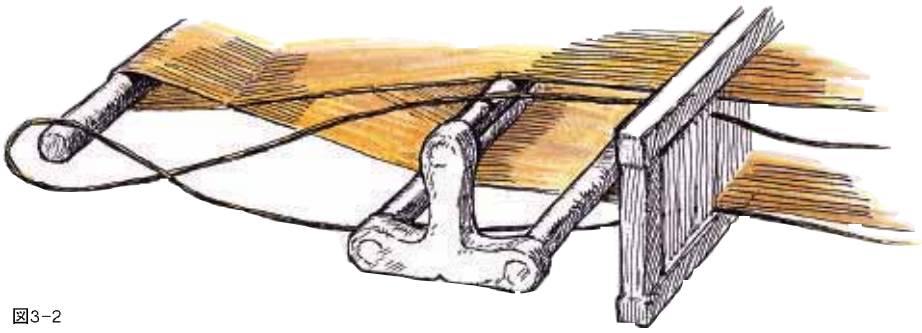


図3-2

縦糸を210本のばしました。上下の糸では420本です。すべてのばし終えると糸の端を最初に結んだ棒杭に縛り付けます。

織り機側から縦糸の仮止めをします。糸が布巻取棒から外れたり、絡まったりしないように綜絖棒の２本の棒を使って糸を挟み、その両端を輪ゴムなどで固定します。(写真34)

写真34

伸ばした縦糸は70～90㎝間隔で数カ所縛ります。こうすることで糸が絡むことがなく、室内での作業もしやすくなります。(図４)

最後に杭の近くを縛り杭を抜き取ってその輪に紐を通して縛ります。糸が絡まないように棒杭で止めてあった側からそっと束ねます。

これで戸外の作業は終わります。

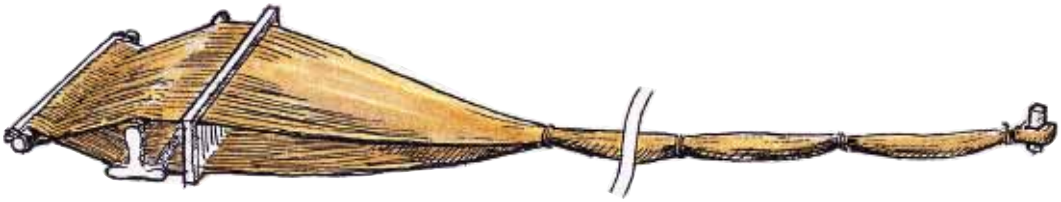


図４

織る準備

横糸の準備をします。縦糸と同じ糸を横糸を巻く棒に巻き付けます。(写真35)

写真35

織り機を固定します。縦糸は柱などに止めます。柱から約３ｍ離して織り機を置きます。織り機側から縦糸の束を柱までのばします。縦糸の束を折り曲げ、その中に棒を入れて縛ります。(図５)

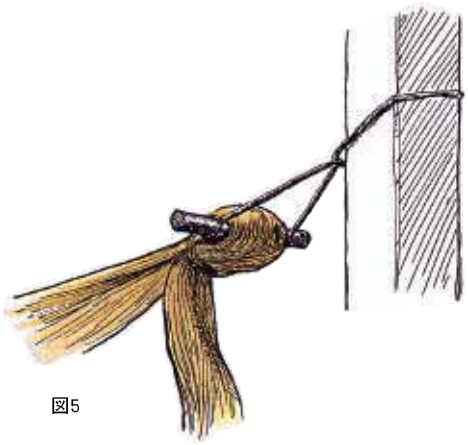


図5

縦糸を巻き付けた棒に紐をかけ床から約35㎝の高さで柱に縛ります。

これは座った時の腰の高さです。(写真36)

写真36

腰当てを腰にまわし布巻取棒に紐をかけます。これで織る時の姿勢になります。(写真37)

写真37

次に下糸をすくいあげて綜絖棒に綿糸を巻き付ける作業です。(写真38)

写真38

まず布巻取棒の手前の上下に分かれている縦糸の間にへらを差し入れ、立てて上下の縦糸を押し広げ、綿糸を通します。

この状態でへらの上にあるのは織る時の下糸です。(図６)

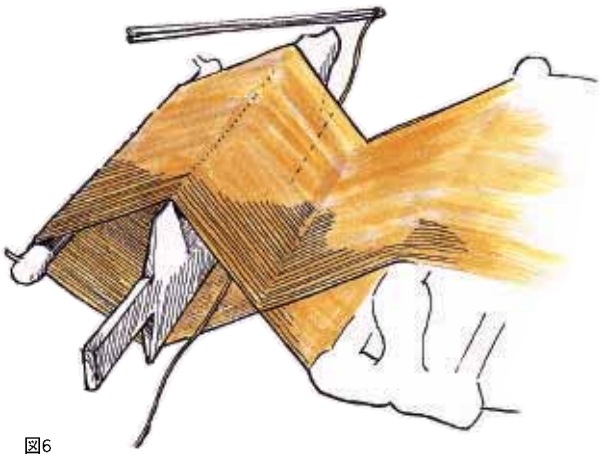


図6

織り手の左手側の端にある下糸を綿糸ですくいあげ、その綿糸を片側を固定した２本の棒・綜絖棒に数字の８の字を描くように巻き付けます。(図７)

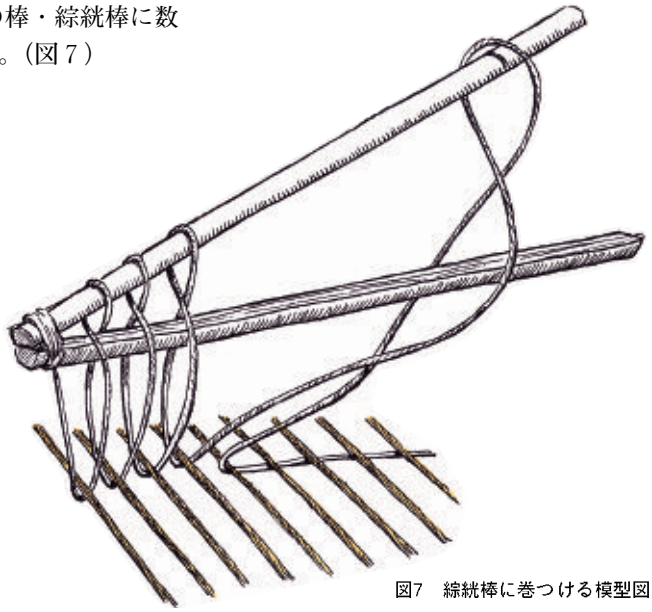


図7　綜絖棒に巻つける模型図

綿糸で下糸を一本一本、順番にすくいとり、下糸との間隔を４～６㎝ほどにして綜絖棒に巻き付けます。

巻き付けるのは上糸の間から下糸をすくう～次の上糸の間から次の下糸をすくう～の順に行います。(写真39)

写真39

下糸の210本全てを巻き付け終わったら綿糸を綜絖棒に数回巻き付け、２本の棒の間に挟みます。綜絖棒の端は紐や輪ゴムなどを巻き付けて固定すると織る準備は完了です。

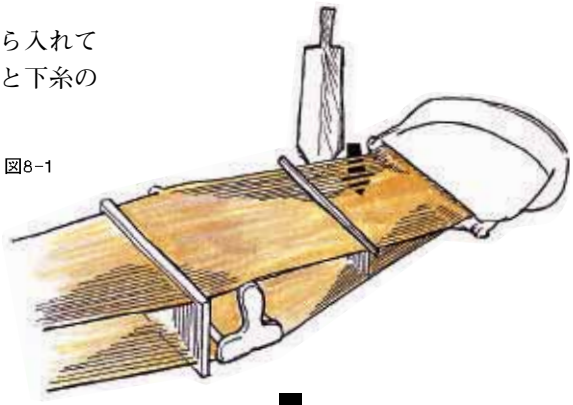
織　る

この織り機は身体を前後させて縦糸をゆるめたり張ったりしながら織り進みます。

織る前には縦、横の糸に水を含ませます。湿った方がへらで締める時に糸に無理がかかりません。まず腰を引き縦糸を張った状態にします。

綜絖棒の手前、上下の糸の間にへらを右から入れて（図８－１）立て、横糸が入り易いように上糸と下糸の間を広く開けます。

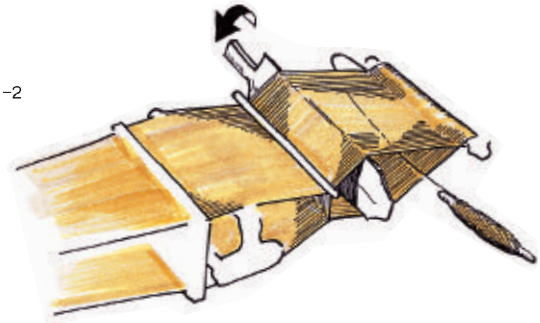
図8-1



その中に右から左へ横糸を通します。（図８－２、写真40）

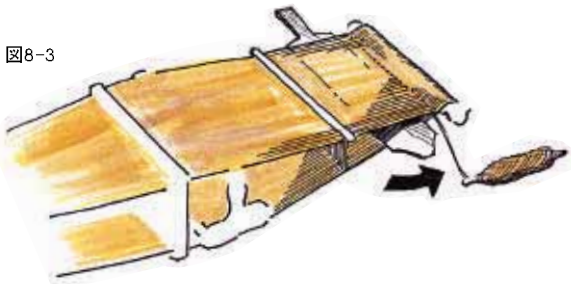
写真40

図8-2



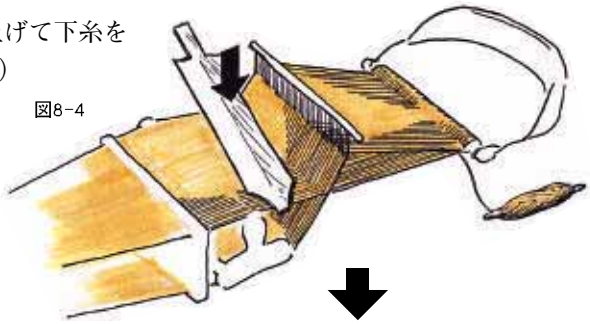
へらを倒して通した横糸を手前に軽く寄せます。この時、上糸は上になっています。（図８－３）

図8-3



へらを抜き左手で綜絖棒の中央を持ち上げて下糸を上げ、上下の糸を入れ替えます。(図８－４)

図8-4

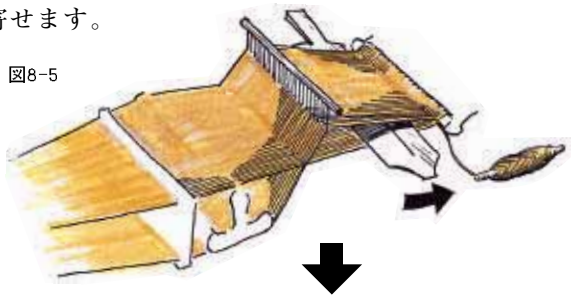


この時、身体を少し前方に傾けて縦糸をゆるめ、へらで縦糸を軽く押さえるようにすると上下の糸が離れ、交叉が容易になります。(写真41)

写真41

綜絖棒を持ち上げ、上下の糸が入れ替わったところにへらを入れ、へらを両手で持ち手前に寄せます。(図８－５)

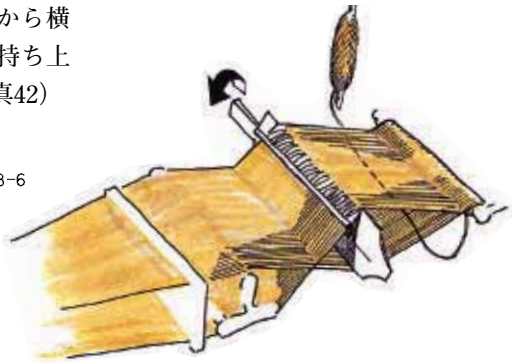
図8-5



そのままへらを立てて上下の糸を開き、左側から横糸を通します。左手で横糸の折り返し点を軽く持ち上げるようにしながら押さえます。(図８－６、写真42)

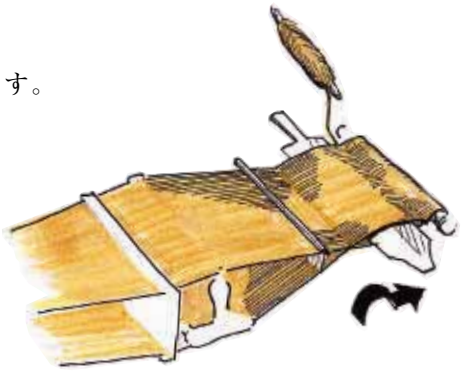
写真42

図8-6



へらを倒し、横糸を軽く叩いて手前に寄せます。(図８－７)

図8-7

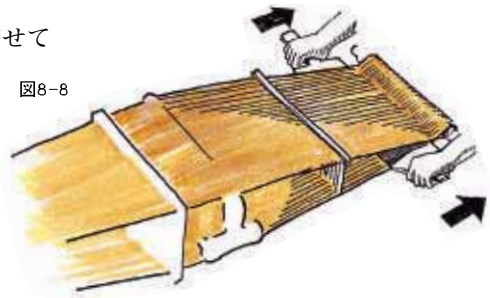


へらを抜き縦糸の上下を入れ替えます。少し身体を反り身にすると上糸が上ります。

ここでへらを入れ、ヘラを両手で持ち手前に寄せて横糸を締めます。

これで一行程が終わります。(図８－８)

図8-8



へらで寄せる時には左右均等に力を入れ一定の力で締めるようにします。(写真43)

写真43

布の幅は36㎝になっています。(写真44)

写真44

布の幅をそろえるために30㎝ほど織り進めたところで腰当てを外し、２本の布巻取棒で挟むように巻いていきます。布巻取棒の一本に腰当ての紐をかけます。(図９)

織り上がった布が織り手の手前30㎝以上になると作業がやりにくくなるので布巻取棒で巻いた分だけ織り手は前進します。

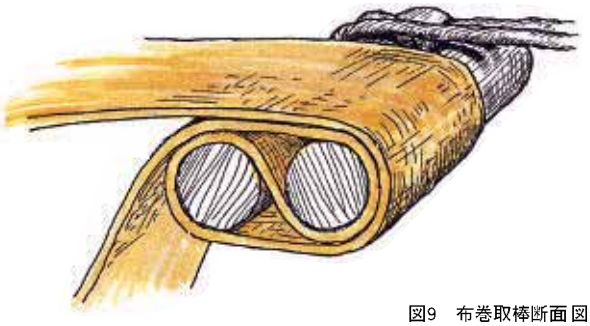


図9　布巻取棒断面図

出来上がっていく布は下に垂らし、床で巻いていきます。(写真45)

写真43

この織り機を使った作業では織が進むにつれ少しずつ前進します。伸ばしている縦糸が２ｍよりも短くなったら縦糸を柱から外して織り機を後ろに下げます。必要な長さまで縦糸を伸ばして縛り直します。

※注意　伸ばしている縦糸が２ｍより短くなった場合、糸を張る力が外側と内側で違ってくるため平均した力で織ることが出来なくなります。

アットシは縦糸と横糸とを一本おきに交差させて織る平織りです。
織り物の基本的な織り方のひとつです。(図10)

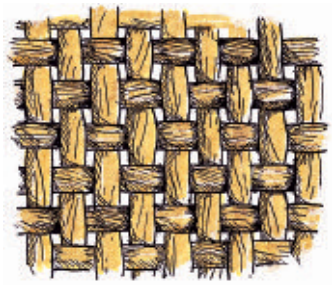


図10

アイヌの織り機「アットシカラペ」は機織り具の中では最も古い形を留めていると言われています。かつてアイヌの慣習として、結婚する時に男性がこの織り機を作り嫁を迎えたといいます。

●糸が切れた場合

横糸は切れた糸どうしを機結びでつなぎます。縦糸の場合、切れた糸をそのままつなぐ方法と別な糸をたして処理する方法があります。

別な糸をつなぐ処理方法です。短いオヒョウの糸を用意し、切れた糸に機結びで繋ぎます。

繋いで伸ばした糸を布側の切れた糸の場所まで伸ばします。伸ばした糸は布側の切れた糸には結びません。糸の張り具合を見ながら他の糸に合わせて置きそのまま織ります。

数センチ織り進んだところで、はみだしている糸を切って処理を終わります。織り進むと抜けることはありません。(図11)

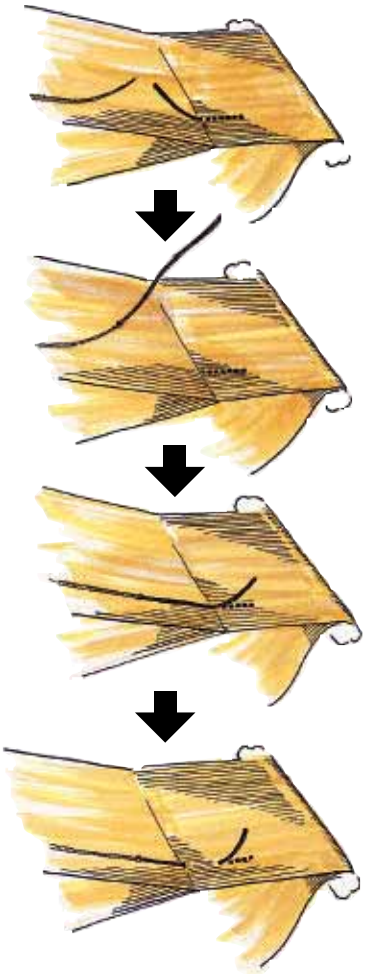


図11　縦糸をつなぐ模型図

●糸の結び目が布の表面に出てきた場合

縦糸や横糸の結び目が布の表側に出た場合には、まずへらでしごいて落ち着かせます。それでも結び目が出ている場合は千枚通しなどで裏側に押し込みます。乾くと押し込めなくなるので湿っているうちに行います。

一着分約８ｍの布が織り上り最後に鋏で縦糸を切ります。ｱｯﾄﾟｼの反物の完成です。残った糸は仕立てる時に縫い糸として使います。(写真46)

写真46

仕立て・切り伏

1　裁　断

　アイヌ衣服は最初から誰のために作るのか決まっており、着る人に合わせた寸法になります。古いｱｯﾄﾟｼの丈は短く、ふくらはぎくらいのものからもっと短いものもあります。

裁断の参考寸法　身頃：２ｍ50㎝×２枚
［布の幅は36㎝］　袖　：　　85㎝×２枚　（図12）

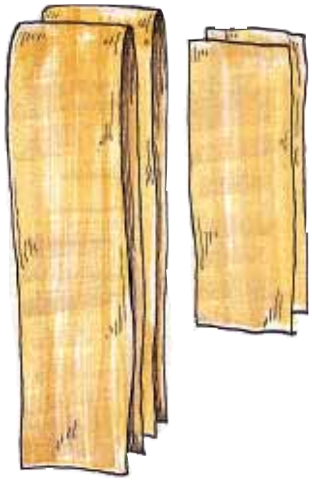


図12

●仕立てに必要な材料

・ｱｯﾄﾟｼ一着分の布
・仕立てる糸（オヒョウの糸）
・切り伏布（木綿布　紺色）
・切り伏布を絡む糸（木綿糸　黒）
・小衿の布（ｱｯﾄﾟｼの布）
・刺繍用の木綿糸（３色、４種類）
白、黄色（キハダで染める）、薄紫（ハスカップで染める）
・針
・ハサミ

※参考寸法は藤谷るみ子さん制作のｱｯﾄﾟｼです。

2　仕立て・身頃

身頃を仕立てます。裁断した布を中央で二つ折にし、左右の布の肩にあたる部分に９㎝づつの切り込みを入れます。ここが小衿になります。

切り込みを入れたところはオヒョウの糸でまつり、解れ止めをします。(図13)

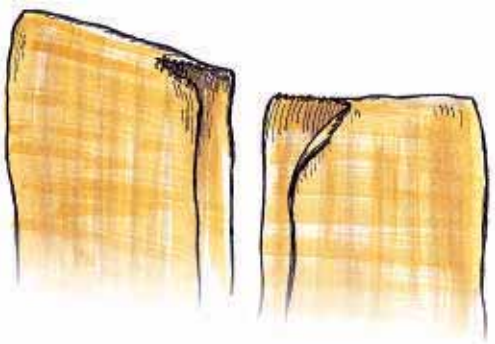
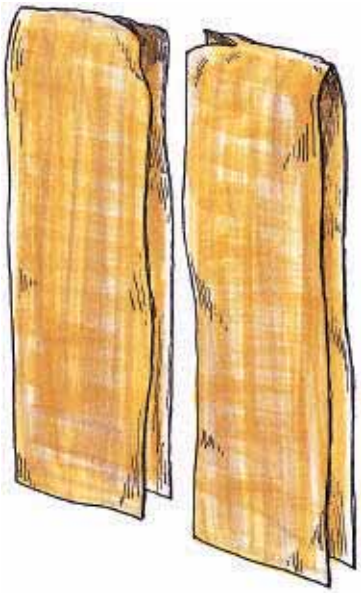


図13



背縫いです。身頃の左右の２枚の布を表側で合わせて裏から背中を縫います。(写真47、図14)

写真47

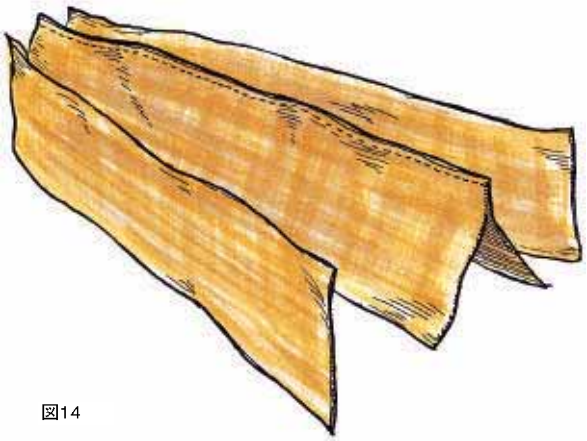


図14

背縫いの縫い代は１～1.5㎝で、返し縫いをして丈夫にします。

糸はオヒョウの糸を使います。縫い目が見えるところには必ずオヒョウの糸を使います。(写真48)

写真48

縫い代分を折り曲げ縫い付けます。(図15)

図15

脇縫いをします。袖を付ける部分（袖付け）を55㎝あけ、袖付けの下から裾までを背縫いと同じように縫います。(図16)

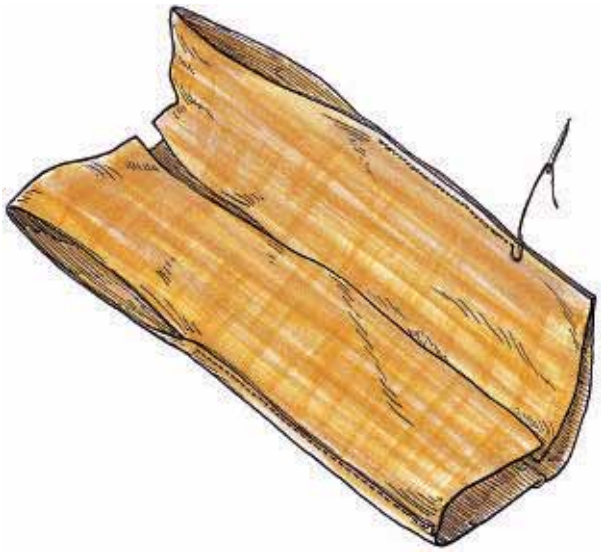


図16

身頃の形が出来上がりました。（図17）縫い糸に布と同じオヒョウの糸を使っているので縫い目が目立ちません。

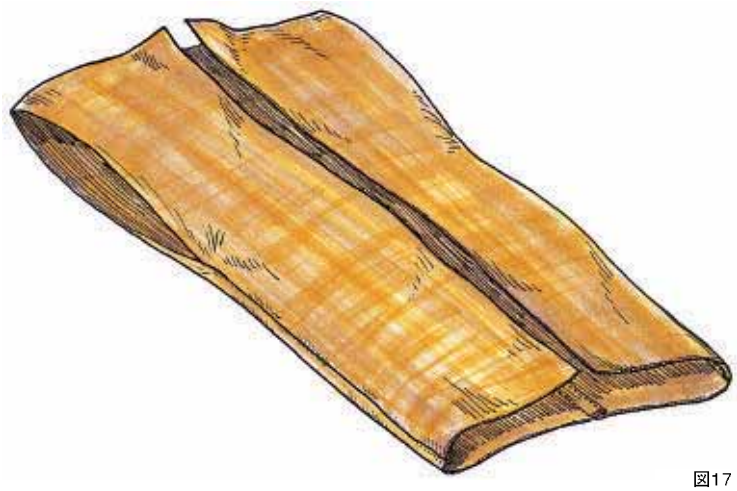


図17

3　切り伏・身頃

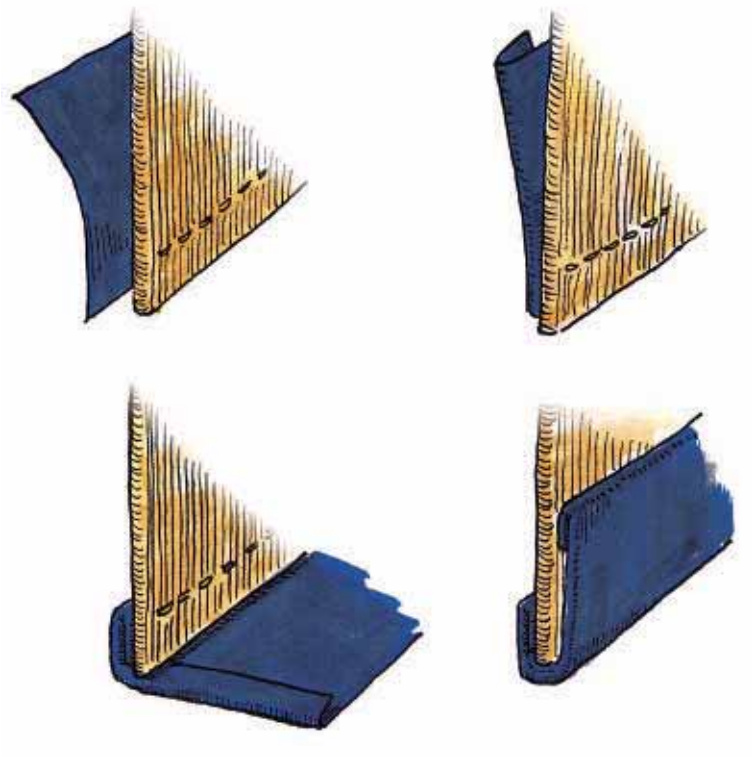
身頃の周囲に直線裁ちの切り伏布を当てます。布を裁断した所が解れてこないように裾から始めます。(写真49)

写真49

身頃を裏返しにして裾の左右の中央に合わせ切り伏布を置きます。切り伏布は幅15㎝で着物のすそ周りよりも少し長い紺色の木綿布です。

裾から1.5㎝の縫い代をとり黒の木綿糸で並縫い（ぐし縫い）をします。その木綿布を表に返し10㎝の幅でしつけをします。(図18)

図18



身頃の前を合わせる部分にも同じように布を当てます。裾側に同じ幅の布をあてます。(写真50)

写真50

中程のところに2㎝幅の布を、さらに上側の衿のつく側には5㎝幅の布を縫い付けます。(写真51)

写真51

衿になる前身頃の上の部分を左右対象になるよう細長い三角形に折ります。ここもオヒョウの糸で縫います。(図19)

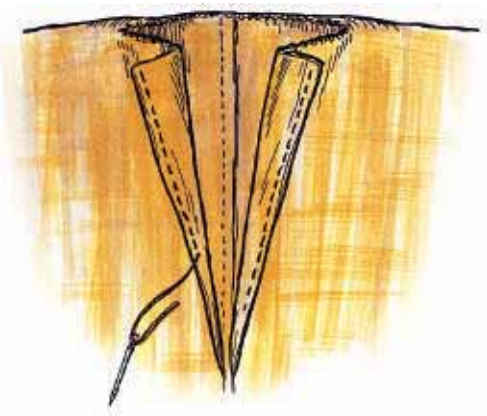


図19

アッ゜シの布を使い肩当てを作ります。長さ32㎝、幅18㎝の布に身頃の肩と同じように切り込みを入れ、内側に縫い付けます。

後で木綿の布で隠れる場所には木綿糸を使い、背中は木綿布で隠れないので、オヒョウの糸を使って縫い目を目立たなくします。前側は衿の形に合わせて切り落としほつれないようにかがります。(図20)

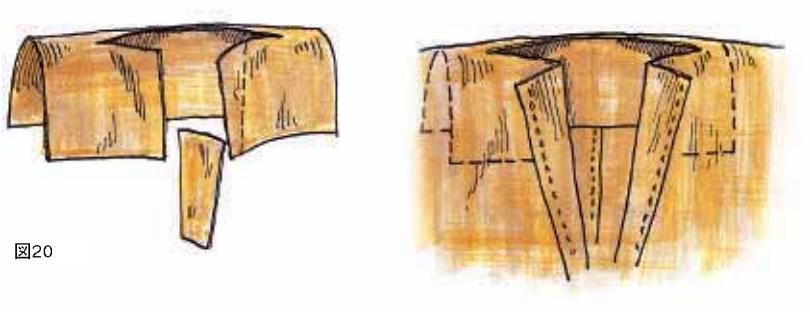


図20

衿に木綿の布を当てます。裏側から衿の部分を取り巻くように布を縫います。(図21)

図21

着た時に首の後ろにあたる部分に２つ折にしたアッ゜シの布で衿芯を縫い付けます。衿芯を縫い付け、衿の形が整ってから紺の木綿布を表側に巻き込みます。

衿の幅は６㎝にします。(図22)

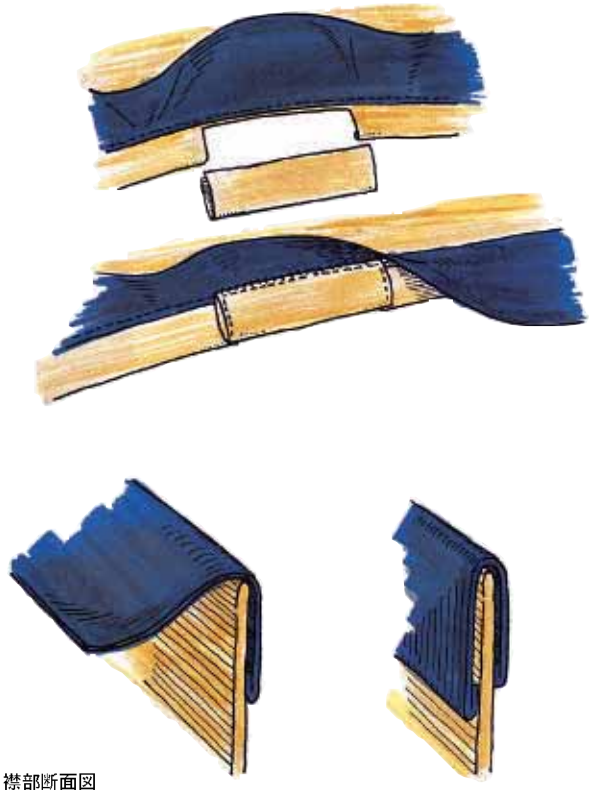


図22　襟部断面図

これで身頃の周囲は全て紺色の木綿布で覆われました。衿から裾に当てた直線裁ちの布は同じ幅にせず変化をつけています。(写真52)

写真52

直線裁ちの木綿布で裾まわりと背中に切り伏模様を縫い付けます。切り伏には５～13㎝までの幅で５種類の木綿布を使います。（写真53、54、55－１・２）

それぞれ縫い代分１㎝を折り曲げています。

写真53

写真54

写真55-1

写真55-2

●切り伏せの布を切らずに直角に曲げる時の処理です。

①布をたわませ直角になるようにまげて位置を合わせ、たわませた部分を裏に押し込みます。②裏返して合わせた部分を縫います。③たわませた部分を対称になるように潰します。④そのまま元に戻し伏せます（図23）。

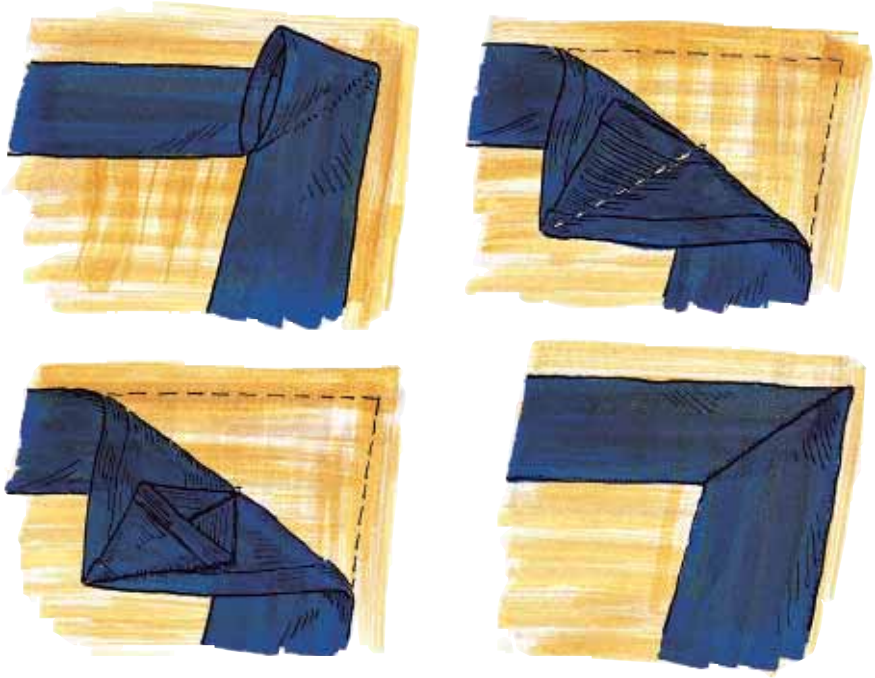


図23

切り伏布の角、全てにとげの様な文様が木綿糸で付けられています。（写真56、図24）

写真56

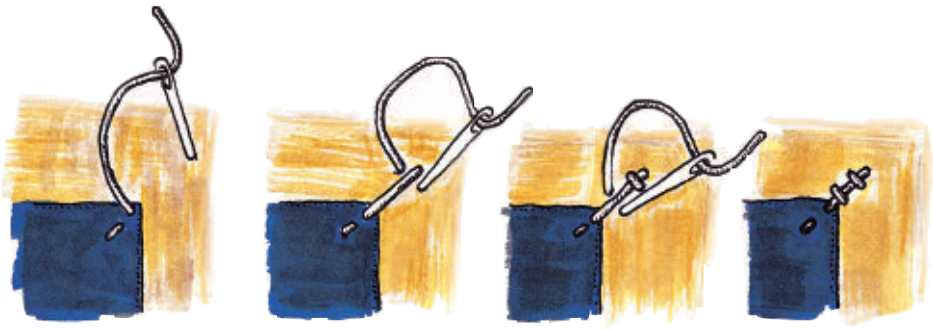


図24

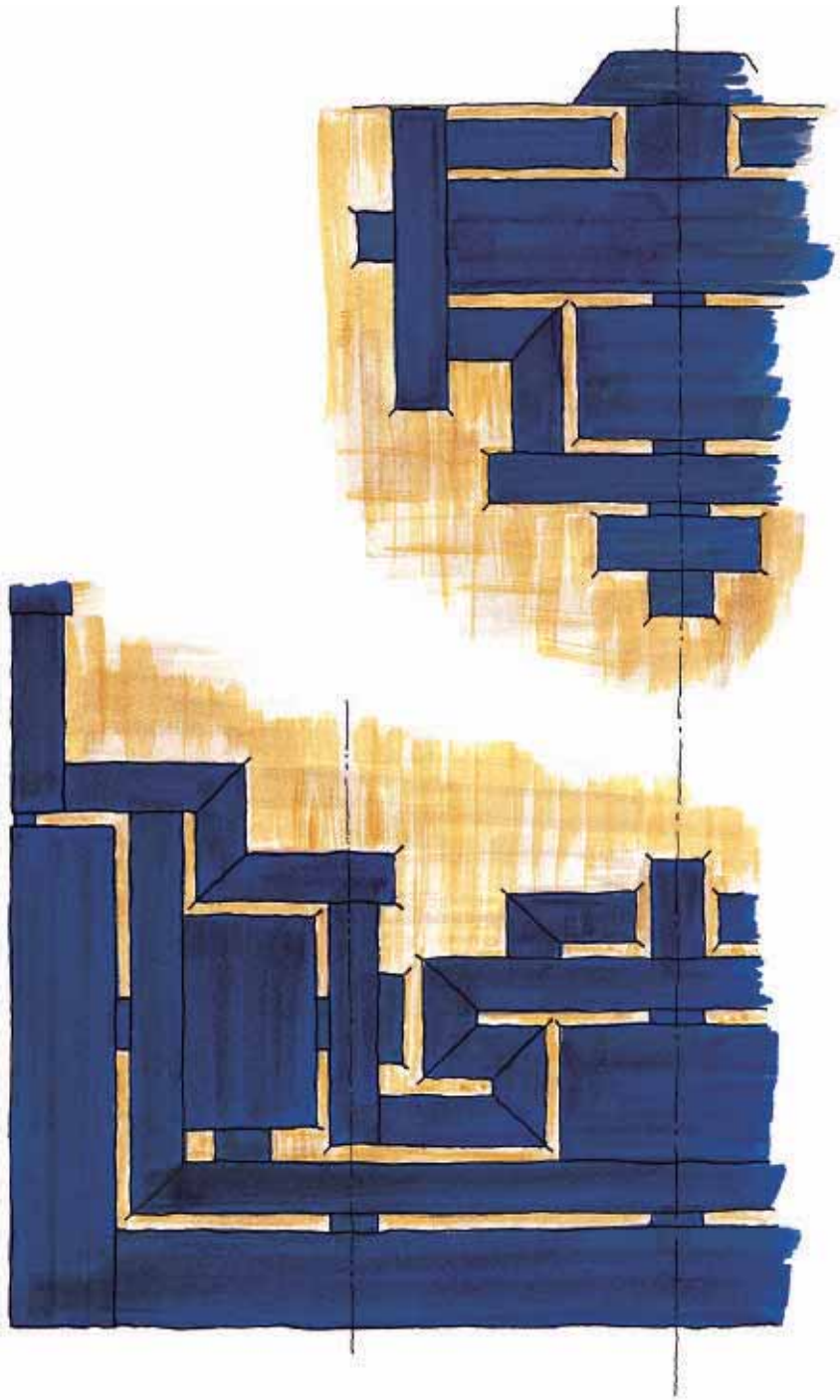


図25　背・裾切り伏せ模様

4　仕立て・袖

袖を仕立てます。布を無駄なく使うもじり袖（むじり袖）です。布の上下を合わせて台形にします。袖の下側は捻って斜めに折り袖口を22㎝、袖付けを55㎝になるようにします。

袖の仕立ては裏返した状態で行います。(図26)

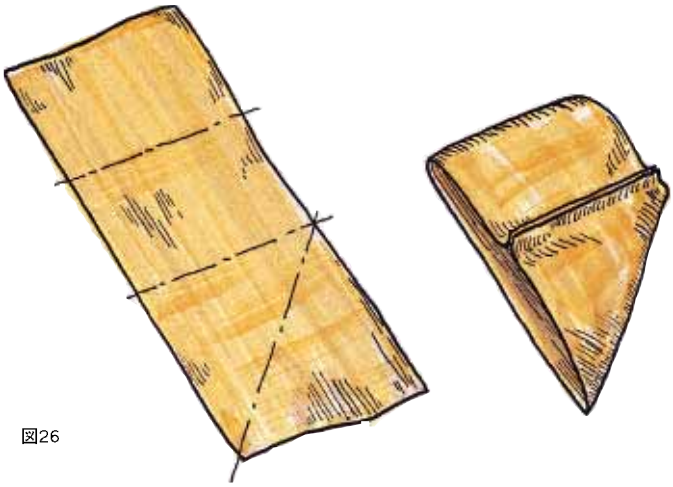


図26

縫い代は下側を多めにとり、上側に折り込んでオヒョウの糸で縫います。(写真57)

写真57

縫い代は木綿の布で覆います。

袖は左右対称に作ります。(図27)

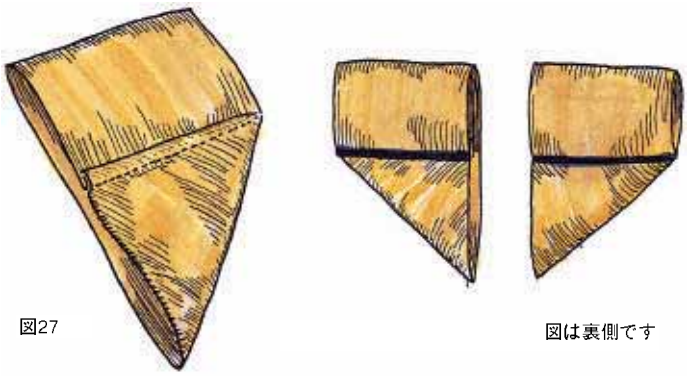


図27

図は裏側です

5　切り伏・袖

裏にしたまま袖口に木綿の布を縫い付けます。木綿布を縫い付けてから表に返し袖口の形に合わせて裁断します。(図28)

図28

袖口の木綿衣を10㎝の幅にしてしつけをします。模様の切り伏布もしつけます。(写真58)

写真58

袖の切り伏模様（図29、30）

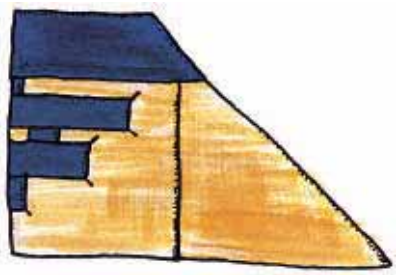


図29

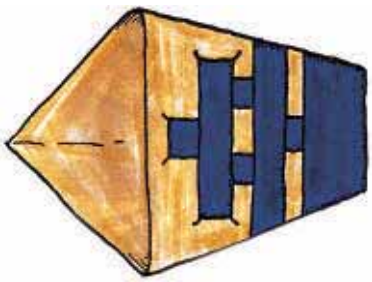


図30　袖山側から見た切り伏模様

身頃、袖口のまわりは全て紺色の木綿布で覆われ切り伏布による帯状の直線の模様が着物の前後に付けられています。

切り伏布はまつり縫いで縫い付けます。糸の縫い始めと縫い終わりの糸玉は表からも裏からも見えないように処理します。(写真59、60)

写真59

写真60

刺　繍

1 刺繍糸を染める

刺繍による模様入れです。刺繍糸は木綿の糸を使います。色は黄色、白、赤紫色の３種類使って刺繍します。白い糸と赤紫色の糸の太さは一種類、黄色の糸は太いものと細いものの２種類用意します。

黄色の糸はキハダ〈シコロ〉の樹皮を使って染めます。採取して保存しておいたキハダの樹皮を水で洗いサラシの袋に詰めます。

鍋に湯を沸かしその中に袋ごと入れ熱を加えて再び沸かします。
黄色い色が十分に溶け出したら色の定着用に塩を入れ、染めていない太めと細めの木綿糸を入れます。

数分煮て色が全体に染まった後、湯から出し流水で洗い干します。

赤紫色にはクロミノウグイスカグラ〈ハスカップ〉の実を使います。染め方はキハダと同じ様に色を煮出し糸を染めます。（写真61）

写真61

2　刺　繍

刺繍はアイヌの刺繍でよく見られる２つの方法です。

始めに黄色の太い糸と細い糸の２種類を使い、駒縫（絡縫）、コードステッチ（コーチング）〈イカラリ〉で刺繍します。イカラリとは、上から押えるというか詰めるという意味です。（写真62、63）

写真62

写真63

模様に沿って置いた太い糸を細い糸で１～２㎜間隔でかがります。（図31）

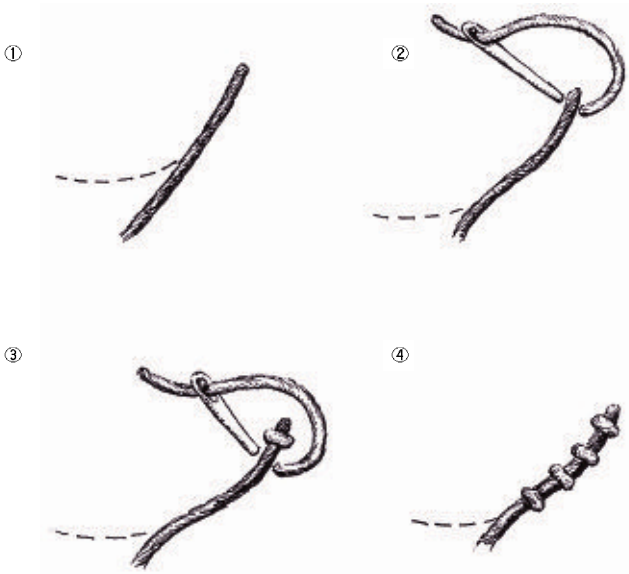


図31　イカラリ

刺繍の始めと終わりは裏側から始め、裏側で止めます。又はオヒョウの布と切り伏布の間に糸玉を作るようにし、布の表には糸玉を出さないようにします。糸玉を隠すなど、着物の裏側にも糸玉を作らないようにします。

一本の黄色い線で刺繍を描いた後、その刺繍の左右を白い糸と赤紫色の糸で鎖縫い・チェーンステッチ〈オホカラ〉で刺繍します。オホとは、針の溝を並べるという意味です。針の溝穴のことは〈オホプイ〉といいます。赤紫色の糸は一部イカラリで囲われた場所に用います。（写真64、65、66）（図32、33）

写真64

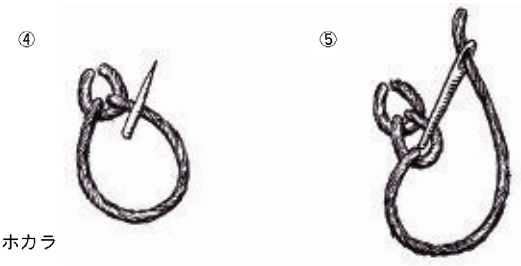


図32　オホカラ

図33

写真65

写真66

袖をつける・紐を取りつける

1　袖をつける

身頃に袖を取り付けます。身頃は裏返し、袖は表にして合わせます。(図34)

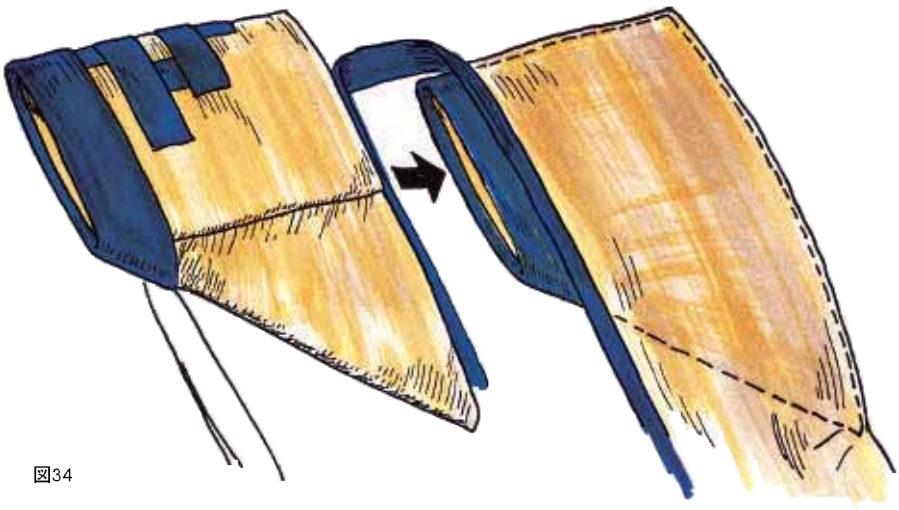


図34

オヒョウの糸を使い、縫った糸が目立たないようにします。袖が曲がったり皺がよったりしないように、また袖が左右対称になるよう慎重に合わせて縫い付けます。(写真67)

写真67

縫い代は袖側に倒しオヒョウの糸で止めます。(図35)

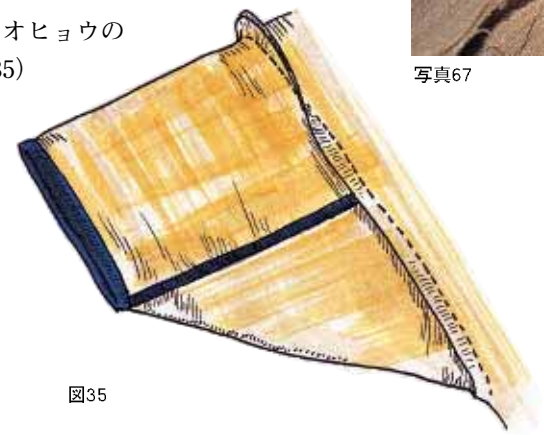


図35

2　紐をつける

着る時に必要な幅2.2㎝、長さ32㎝の紐を縫い付けます。この紐は合計４本で、右袖下の外側、前身頃の左右の衿の下の２ケ所と左袖下の内側です。昔は、このように紐をつけないで、みんな帯でした。したがって、古い着物には紐はついていないものです。(図36)

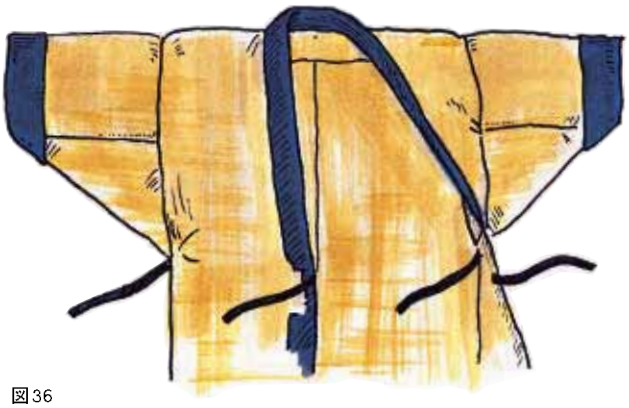


図36

完　成

写真68

写真69

写真 70

写真 71

アイヌの樹皮衣・アッ゜シは、日常の衣服としてだけではなく、晴れ着として、男女、大人子供の区別なく幅広く着用されてきました。

糸の一本一本、布の一織一織、模様の一針一針に丹精が込められてきたアッ゜シは愛する者のために手間を惜しまず作られたのです。

その技術はアイヌの女性の心とともに母から娘へと伝えられてきました。そしてその伝統は今も受け継がれているのです。

参　考　文　献

アット゜シの製作にあたって、参考となる文献をいくつか紹介します。

・アイヌ民族博物館

1992：『アイヌの衣服文化―着物の地方的特徴について―』増補版　アイヌ民族博物館

・岡村吉右衛門

1979：『アイヌの衣文化』衣生活研究会

1993：『日本の染織16　アイヌの衣装』京都書院美術双書　京都書院

・萱野　茂

1978：『アイヌの民具』「アイヌの民具」刊行運動委員会

・児玉マリ

1967：「アツシ織機とその操作について」『北海道の文化』11　北海道文化財保護協会

1968：「アツシの語義とその種類について」『北海道の文化』15　北海道文化財保護協会

1969：「アツシにつかうオヒョウの皮剥ぎと処理について」『北海道の文化』15　北海道文化財保護協会

―　：「アツシの材料、機織および仕立」『アイヌ民族誌』上　第一法規出版

1975：「アツシを織る機」『服装文化』148　文化出版局

1991：「衣服の種々相Ⅱ―種類と製作技術―」『ひと　もの　こころ―アイヌのきもの―』3～5　天理教道友社

1995：「アイヌ女性の手織の技術」『アイヌの工芸』日本の美術354　至文堂・難波琢雄

1994：「アイヌ衣服の素材について」『シンポジウム　アイヌの衣服文化』財団法人アイヌ民族博物館

・北海道教育庁社会教育部文化課編

1986：『アイヌ衣服調査報告書（Ⅰ）―アイヌ女性が伝承する衣文化―』北海道教育委員会

・北海道教育庁生涯学習部文化課編

1995：『平成10年度　アイヌ民俗文化財調査報告書』アイヌ民俗調査ⅩⅧ　補足　調査５　北海道教育委員会

・村木美幸

1993：「アットゥシ製作の全工程」『別冊宝島ＥＸ　アイヌの本』宝島社

・吉本　忍

1993：「アットゥシ衣の製作技術」『アイヌモシリ―民族文様から見たアイヌの世界』国立民族学博物館

アットゝシを展示・収蔵している施設

アットゝシを展示、あるいは収蔵している施設をいくつか紹介します。

北海道内

・アイヌ民族博物館　白老町若草町２－３－４
・旭川市博物館　旭川市神楽３条７丁目
・網走市立郷土博物館　網走市桂町１－１－３
・浦河町立郷土博物館　浦河町字西幌別273
・乙部町公民館郷土資料室　乙部町字館浦４－１
・帯広百年記念館　帯広市緑ヶ丘２番地
・上川町郷土資料室　上川町新町
・萱野茂二風谷アイヌ資料館　平取町字二風谷
・川村カ子トアイヌ記念館　旭川市北門町11丁目
・様似町郷土博物館　様似町会所町１
・静内町アイヌ民族資料館　静内町真歌
・標津町歴史民俗資料館　標津町字伊茶仁278
・知内町郷土資料館　知内町字重内31−47
・弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民俗資料館　弟子屈町字弟子屈276−１
・苫小牧市博物館　苫小牧市末広町３－９－７
・根室市郷土資料保存センター　根室市花咲港209
・函館市北方民族資料館　函館市末広町
・浜益村郷土資料館　浜益村大字浜益村８－５
・美幌博物館　美幌町字美禽253−４
・平取町立二風谷アイヌ文化博物館　平取町字二風谷
・北海道大学農学部附属博物館　札幌市中央区北３条西８丁目
・北海道開拓記念館　札幌市厚別区厚別町小野幌
・北海道立ウタリ総合センター　札幌市中央区北２条西７丁目
・北海道立北方民族博物館　網走市字塩見313−１
・幕別町蝦夷文化考古館　幕別町千住114−１
・松前城資料館　松前町字神明
・松前町郷土資料館　松前町字松城
・室蘭市民俗資料館　室蘭市陣屋町２－４−25
・森町公民館郷土資料室　森町字御幸町132
・羅臼町教育委員会　羅臼町栄町102
・留萌海のふるさと館　留萌市大町２－３

北海道外

・青森県立郷土館　青森市本町２－８−14
・稽古館　青森市大字浜田玉川207−１
・東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館　仙台市青葉区国見１－８－１
・東北歴史資料館　多賀城市浮島字宮前133
・東京国立博物館　東京都台東区上野公園13−９
・国立民族学博物館　吹田市千里万博公園10−１
・天理大学附属天理参考館　天理市布留町１
・松浦武四郎記念館　三重県三雲町大字小野江383

アイヌ生活文化再現マニュアル
織る－樹皮衣－

2000年3月　発行

発 行　財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001
北海道札幌市中央区北1条西7丁目
プレスト1･7（7階）
TEL (011) 271-4171／FAX (011) 271-4181

監修　萱野　　茂

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で禁止されていますので、あらかじめ財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構あてに許諾をお求めください。

企画・制作◆財団法人　アイヌ文化振興・研究推進機構